

花嫁の竜使りゅうし

新緑の乙女は

聖竜の守護者に

愛される



ショコラ

明るく、好奇心旺盛な竜。
アリーシアに懐いている。

グラントリー・シングレア

聖竜を守護するシングレア伯爵
にして、飛竜便を営むシングレア
商会の会頭。

アリーシア・バーノン

子爵家の令嬢だが、屋敷内で冷
遇されている。ジュニファーの代わ
りにグラントリーに嫁ぐことに。

登場人物
紹介

Characters



ハロルド・バーノン

アリーシアの父、バーノン子爵。
自分の商売とアリーシアの亡き
母親以外、興味が無い。

ライナー

飛竜便の所長。人情に
厚く、アリーシアのことを
気にかけている。

ハリエット・バーノン

アリーシアの義母、バーノン子
爵夫人。プライドが高く、娘の
ジェニファーを溺愛している。

ジェニファー・バーノン

アリーシアの義姉。父の裏切
りを知りアリーシアにきつく当
たっている。



Contents

プロローグ	なにもかもなくした日	006
第一章	バーノン家の闇	018
第二章	闇の底へ	052
第三章	空が見えた日	088
第四章	たった二つの大切なこと	108
第五章	わがまま王女と北の国の使者	154
第六章	傷のある娘	194
第七章	心の声	228
エピローグ	帰るところ	260
おまけの話	竜の飛ぶ空	272

プロローグ なにもかもなくした日

カリカリという生真面目なペンの音が事務所の中に響く。

「冬の初めの雪嵐が吹きすさぶ中でも、皆様が暖炉の前で温かい香草茶を楽しめますように、と。できた！」

アリーシアは、一二歳の少女には少しばかり高すぎる大人用のテーブルの上に、使っていたペンをことりと置き、足をぶらぶらさせながら奥のドアの向こうに大きな声で呼びかけた。

「ライナーさん！ 終わりました！」

「終わったか！ ありがたい」

声と同時に奥のドアが開いて急いで出てきたのは若い男性で、アリーシアの書いた紙をすぐに取り上げた。茶色の髪と、髪より少し明るい茶色の瞳のライナーはおそらく二〇代だと思ふのだが、よほど優秀らしくまだ若いのにこの事務所の所長を任されている。

「なにに、こちらでは秋の終わりに鮮やかに色づいた木の葉も落ち？ あー、もう、なんでこの国はこう説明が長いんだよ……」

二枚にわたる紙は、アリーシアが翻訳したアルトロフという国からの注文書だ。ライナーはざっと紙に目を通すと、テーブルに静かに紙を置いてうなだれた。

「で、結局これ、こんなに長くても、一月いっぱいまでにオレンジを二箱分の注文ってだけなん

だよな？ 今、一二月の半ばなんだけど」

「そうみたいです」

アリーシアはクスリと笑った。その注文の他はすべて時候の挨拶で、簡素を旨とするこの国の習慣とは相性が悪い。しかも、馬車で二ヶ月かかるアルトロフとは言葉も文字も大きく異なる。そこで、まだ幼いながらも母親がアルトロフ出身で翻訳ができるアリーシアが重宝されているというわけである。

「そりゃあ確かに飛竜便の出番だよなあ」

馬車では二ヶ月かかるが、飛竜なら二日で到着する。一二月半ばの今なら、定期の飛竜便を使えば月末には余裕で間に合うというわけだ。もつとも運賃は非常に高価である。

ここは、その竜を使った飛竜便の事務所なのだ。外ではタイミングよく悲鳴が上がり、ばっさばっさと風を煽る音とともに、ドシンという着地音がした。アリーシアは目をきらめかせた。

「もしかして、竜？」

「見たいのか？ 竜は怖いってのがたいいの女の子なんだがな。近くには寄るなよ。ほら、今日のお駄賃」

ライナーはアリーシアの手のひらに銀貨を二枚置いた。

「お母さんの具合はどうだい？」

「あんまりよくないの。とにかくご飯を食べてくれなくて」

アリーシアの顔が曇る。

母子二人暮らしのアリーシアの家は、少し変わっている。父はたまにしか顔を出さない。もとはといえば、アルトロフに商売に来た父と出会った母は恋に落ちたが、家族に反対され駆け落ちをしてきたというこころらしい。

「それは嵐のような恋だったの」

母のセシリアは今でも夢見るように話す。アリーシアには恋というものはよくわからなかった。町の外れの庭付きの一軒家に住み込みのばあやが一人。一ヶ月に一度ほどしか来ない父を待つて暮らす母は、寂しそうではあったが確かにいつも幸せそうにしていた。

アリーシアから見てもあまり得意ではなさそうな家事をそれでも楽しそうにこなし、たまに来る父に手料理を振る舞っては父と微笑み合う母は、父とともに仲がよさそうだった。

商売をしているらしい父は、長い行商にも出る。そんな時には三ヶ月から半年も帰ってこないことがよくあった。だが今回ばかりは不在が長すぎた。

父が来なくなつたのは今から二年前のことだ。

「セシリア。今度の旅は長くて、一年ほどかかる。この旅が終わったら、もう少し一緒にいられるようになると思うから、待つていてくれるか」

そう言った父は、涙を浮かべる母の緑の瞳を覗き込み、その金の髪に愛しそうに触れた。黒や茶色の髪が多いこの国では、母のような淡い金髪や緑の瞳はとても珍しい。父もこの国の人らしく、まつすぐな黒髪に青い瞳だ。アリーシアはおさげにした自分の髪を眺めた。父に似たまつすぐな黒髪は、三つ編みにしてもすぐにさらさらとほどけてしまう。母のような明るい色の柔らかい髪がよ

かったのにと口をとがらせそうになるが、我慢する。

アリーシアの黒髪は、父にそっくりだからと母がとても大切にしているのだ。

「アリーシアと一緒にちゃんと待っているから、体を大事にね」

「ああ。アリーシアも、お母様を大切に守っておくれ」

アリーシアは大きく頷いた。おっとりとした母は娘から見ても心配で、言われなくても守るつもりだった。

だが、一年を過ぎた頃、生活費が届かなくなった。いくらばあやが親切でも、給料がなくては暮らしてはいけない。それから三ヶ月、ばあやは引退し、息子のところに去っていった。

そこからはどう生活していいかわからない母のために、アリーシアが頑張らざるをえなかった。もともと母は、滅多に家を出ない。そして年をとったばあやの代わりに、アリーシアが買物にも出していたのだ。

まず、小さな家で売れるものは何でも売った。

セシリアが大切に取ってあったアリーシアの小さい頃の洋服も、古着屋に持っていけばそれなりの値段で売れた。子どもだからと買い叩かれた時もあったが、信頼できる店を見つけてからは少しは高く売れた。

だが、それでしのげるのはほんのわずかな時間だ。

一年と半年たって、戻ってこない父を心配する母は元気がなくなり、寝込むことも多くなった。

寒い北にあるアルトロフの国で育った母には、特に暑かったこのセイクタッドの夏はかなりこたえ

たらしい。

アリーシアがなんとか下面したお金で医者を呼んでも、病気ではなく衰弱しているだけなので、とにかく栄養のあるものを食べさせろと言うばかり。

しかし、運はアリーシアを見捨ててはいなかった。売るものもなくなった頃、仕事を求めて町をさまよっていた時に見つけたのが翻訳の仕事である。

風に吹かれて飛んできた紙を思わずつかむと、そこには、母に教わっていたアルトロフの言葉が書いてあった。

「日持ちするブドウを箱に半分」

思わず読み上げたアリーシアの肩をガシツとつかんだのが、飛竜便の事務所のライナーだったのだ。

「お前、その手紙、読めるのか？」

短い髪をぼさぼさにした背の高い青年に驚きながらもこくりと頷いたアリーシアは、その日数通の手紙を翻訳し、一通につき銀貨を二枚もらうことができた。銀貨一枚で、節約すれば二人で三日はしのげる。母に果物も買って帰れる。

駄賃をもらって喜んでいるアリーシアを上から下までじつと観察していたライナーは、しゃがみこんでアリーシアの目を覗き込んだ。アリーシアの二年近く買い換えていない服は、袖も丈も短い割に、やせたせいでぶかぶかしており、母の代わりに家事をしている手はガサガサだ。

「手紙はいつもあるとは限らないが、雑用はいつでもある。手紙の翻訳以外は駄賃はたくさんは出

せないが、この事務所に来たら手伝いに雇ってやるから、いつでもこい」

「ありがとうございます」

それから半年。飛竜便の事務所で働きながらも本物の竜を見たことがなかったアリーシアに、初めて間近で見る機会が訪れたのだ。

ライナーについて事務所の外に出たアリーシアの目の前には、茶色の大きな竜がでんと座り込んでおり、その背中からひらりと誰かが飛び降りるのが見えた。

「竜だ！」

感動で思わず両手を広げたアリーシアの手から、銀貨がちりんと落ちた。

「わわ、大変！」

慌ててお金を拾ったアリーシアの耳に明るい笑い声が響いた。

「まず竜で、次にお金か。私はこれでもけっこう女の子には人気なんだけど、自信がなくなってしまふな」

その声のほうを向くと、竜から降りたらしい男の人が腕を組んで立っていた。ライナーより年下に見える若い人だ。

にこりと笑みを浮かべているその青年は、柔らかな薄茶の髪を短く整え、細身ながらも長身でたくましい。生き生きと力があふれるような青い目をしていた。その人の後ろに目をやると、確かにいつの間にか、竜を遠巻きにしつつも町のお姉さんたちが集まっている。

「若。馬鹿なこと言っていないで、さっさと荷下ろししてくださいよ。その子は大きくなったらうち

の事務所に勤めるんですから、からかわないでください」

「へえ、優秀なんだね」

若、とはつまり、ライナーの主筋しゅすじにあたる人ということなのだろう。今ライナーは、上の立場の人の前で、アリーシアにずっと働きに来ていいよと言ってくれたのだ。アリーシアはその親切をありがたく思いながら、ぺこりと頭を下げた。

若と呼ばれた人はつかつかと歩いてくると、アリーシアの前で足を止めた。それから胸ポケットをこそこそすると、何かをつかみだした。

「手を出してごらん」

アリーシアは何も考えず銀貨を握ったほうの手を差し出した。

「はい。竜を怖がらなかったご褒美ほうびだよ」

「わあ」

それは色とりどりの包み紙に包まれた館あめだった。銀貨の上にそつと重ねて置かれた館に満面の笑みで顔を上げたアリーシアと目を合わせたその人は、驚いたように目を見開いた。

だがアリーシアも驚いた。

「お空の目？」

青いと思った目は、少し淡くて、晴れた日の空の色をしていた。あまり見たことのない色だ。「空？ そんな風に言われたのは初めてだ」

その人はくしゃりと笑顔を見せた。



「俺の目が空の色なら、君の目は、南の海の色だね」

「南の、海？」

海は青だろうと首を傾げたアリーシアにその人は続けた。

「ああ。南のほうの海はね、白い砂浜に映える、それは鮮やかな緑色なんだ。きれいだね」
アリーシアはぽかんと口を開けた。きれいななんて言われたのは初めてだ。

「ブッン」

「きゃあ！」

突然少し生臭い風が吹きつけられたかと思うと、いつの間にか竜が近づいてきていて、アリーシアに鼻息を吹きかけたところだった。そしてアリーシアのお腹に大きな頭を押し付けた。

きゃーっという恐怖の悲鳴が遠巻きにしていた女の子から上がったが、アリーシアは嬉しくてたまらなかつた。なでもでもいいだろうかと、館を握っていないほうの手を宙にさ迷わせる。

「珍しいな。竜が竜使以外に懐くなんて」

ライナーの声に、驚いて止まっていた若と呼ばれた青年がおかしそうに笑いだした。

「ははは！ 確かに珍しいね。でもその館、こいつの好物なんだよ。さ、竜にとられないうちにおかえり」

「はい！ ありがとう。さようなら！」

アリーシアはまたべこりと頭を下げると、銀貨と館を握りしめて駆け出した。

「お母様は甘いものが好きだもの、この館なら食べてくれるかもしれない」

そうしたら少しは元気になってくれるかな。

だが、アリーシアが希望を持って笑みを浮かべられたのは、この日が最後だった。

アリーシアが家の前まで走ってくると、そこには見覚えのない馬車が停まっていた。

「誰だろう」

なんにせよ、家には母しかいない。アリーシアが門から見るとドアは開きっぱなしだ。急いで家に入ると、母の部屋に急ぐ。

「セシリア！ 元気を出すんだ！」

久しぶりに聞いてもすぐに思い出せた。この声はお父様だ。アリーシアはやはり開けっ放しの母の部屋に入った。記憶にあるのと同じままの父が、母のベッドの横にひざまずいている。

「ハリー、最後に顔を見られてよかった」

母は何を言っているのだろう。ふと横を見ると、いつも来てもらっているお医者様が部屋の隅に立っていた。アリーシアと目が合うと、かすかに首を横に振った。

「アリーシアを頼むわね」

その言葉を最後に、父の手に握られていた母の手がぱたりと落ちた。動けない父の代わりに、医者
者は母を見て何かを確認すると、もう一度首を横に振る。

「お亡くなりになりました」

「うわー！」

父が泣き叫んでいたが、アリーシアの耳には入ってこなかった。亡くなったってなんだ。今朝だつて少しお水を飲んだし、これからもらつてきた飴を一緒に食べるのだ。それから、それから。

「あ、あ。お母様」

母に伸ばした手は、強い力で払いのけられた。

勢い余つて尻餅をついたアリーシアの手から、ちゃりんと音を立てて銀貨が飛び、色とりどりの飴は部屋のあるところに飛び散つた。

「お前は！ セシリアが苦しんでいた時！ なんでそばにいなかった！」

父が何かを言っていたが、アリーシアの耳を滑りぬけていった。とにかく飴を拾わなければ。

「飴を。お母様に」

「セシリアは、もうどんな食べ物も、口に入れることはできないんだ」

飴を拾つた手は、また父に叩かれる。せつかく拾つた飴はまた部屋に飛び散つた。

「こんなものを買ひに出ていたのか。こんな贅沢な外国の飴を買う金があったのなら、なんでセシリアに食事をとらせなかった！ こんなもの！」

グシャリと。

父は部屋に散らばつた飴を踏みつけた。

グシャリ、グシャリ。

「バーノンさん！ やめなさい！」

医者が父を止めるが、父は止まらない。

「アリーシアが！ 自分で稼いでセシリアさんを食べさせていたんですよ！ あなたがいない間、贅沢なんてこれっぽっちもせず！」

「うわー！ セシリア！」

この飴を食べさせたかった人はもういない。アリーシアは呆然と床から顔を上げた。

そこには、よく知っていたはずの父が医者はに羽交がい締じめにされて暴れていた。まるで知らない人
のようだった。

この日おそらく。

アリーシアは、母親だけでなく、父親をも失ったのだった。

第一章 バーノン家の闇

アリーシアはお茶と茶菓子をかートの上に用意し、使用人のお仕着せを手のひらで整えると、ひっそりとため息をついた。そして自分に言い聞かせる。

「あと半年。あと半年だから」

あと半年あれば、一六歳になる。一六歳になれば成人だから、この家を出ていける。仕事は選ばなければなんとか見つかるだろう。一二歳の頃の自分でも少しはお金を稼げたのだから。

今はこの牢獄のような家から離れられないけれども、このバーノン家から出ていくことだけがアリーシアの希望だった。

それから温室へとカートを動かした。外国と取引をする父のついでで珍しい果物や草花が植えてあり、小さいながらもバーノン家の自慢の温室である。

「お嬢様、お茶をお持ちいたしました」

「いやだ、アリーシア。いつも言っているじゃない。お姉さまって呼んでいいのよって」

美しく着飾り、甘ったるい声でしゃべっているのは義姉ぎしのジェニファード。この国では珍しい濃い金髪を高く結い上げ、アリーシアのほうに向けるのは青い瞳で、優しい言葉とは裏腹に、その目には蔑さげすみが浮かんでいる。目を合わせないようにしていても、いつものことなのでアリーシアにはわかっている。その色合いはアリーシアの優しい母と似ているはずなのに、嫌悪感が先に立つの

は中身が意地悪なせいだろう。黙って頭を下げると、静かに義姉とその婚約者の座るテーブルにお茶の準備を始めた。

「ジェニファーもこう言っているんだから、甘えたらいいのに。そうだ。君も座ってお茶を飲んでいったらどうだい」

「いえ、申し訳ありませんが、仕事がありますので」

義姉と婚約者の甘い言葉を信じてその通りにしたりしたら、後でどれだけ叱られることか。アリーシアはあざの残る腕のことは考えないようにし、なるべく早くこの場を去りたくて、でもそのそぶりを見せないように手早くお茶の用意を終わらせる。

「うちは娘として扱うって言ってるのに、下賤げせの母親の子どもでは子爵家の娘とは言えない、働かせてくれるって言われたら、そうするしかないもの」

「ジェニファーは心が広いよね」

茶番だ。

アリーシアは心を凍らせたまま何も答えずに温室を出ようとした。

母は下賤の者ではない。幼い頃から母と二人で育ったアリーシアは、ここに来るまで身分など気にしたことなかつた。母が言った「人にとって大事なのは思いやりの心よ」という言葉は、この家の中では通用しないということを知ったうえでもまだ、大事なのは身分ではないと思っている。

だからこそ、自分から母のことや自分のことをけなしたことなど一度もない。アリーシアを娘として扱わず使用人として働かせるのも、母を貶おとしめるのもバーノン家の者が勝手にやっていること

だ。

でも、それを口に出さないほうがいいということもこの三年半で身につけざるをえなかった。

「そうそう、アリーシア」

「はい、お嬢様」

うわべで何と言われようとも、こう返事をする習慣が身につけていた。返事をしなければ食事を抜かれ、ひどい時には叩かれる。それが当たり前だったから。

「一年後私が嫁ぐ時、あなたも連れていくことにしたから。感謝してね」

「はい？」

言われたことが頭に入ってこなくて、思わず聞き返した。ジェニファアはアリーシアのことを毛嫌いしている。結婚してまでアリーシアが身近にいるのを喜ぶとは思えなかったからだ。だがそれを深く考える前に思わず身がすくんだ。返事にお嬢様とつけなかったから、また叱られるかもしれない。

「どうせお前のような身分の者、成人しても行く当てもないんだから、私の侍女として婚家に連れて行くと言っているのよ。母親が卑しいと本当に頭まで悪いのね」

アリーシアを傷つけるには母親のことを言うのが何よりだとわかっている、意地悪な義姉の言葉だが、少なくとも叱られ叩かれなかったことにほっとし、何も言い返さずもう一度頭を下げると、なるべく静かに温室を出た。動揺を悟られたら付け込まれるのだから。この家に来て以来ずっとそうだ。

母が亡くなって呆然としている間に葬式は済み、母は共同墓地の端に埋葬された。すべてが終わって一人で元の家に帰ろうとしたアリーシアに父は言った。

「どこに行くのだ」

アリーシアは不思議に思い、父を見上げた。家に帰る以外のどんな選択肢があるというのだろうか。その様子を見て一緒に埋葬に立ち会ってくれた医者が口元を引き結ぶのが見えた。

「家に、帰ります」

「一人で暮らせるわけがなからう。かわいげのない。セシリアの住んでいた家は売りに出す。お前は私が引き取る」

父はアリーシアに、自分と一緒に行くことも共に暮らそうとも言わなかった。年のわりに聴く生ききなければならなかったアリーシアは、引き取るというその言葉一つで、父親にとってアリーシアがお荷物に過ぎないのだと悟った。

二年ぶりに会ったというのに、母が亡くなってからずっと父はアリーシアに冷たい態度をとっている。ひそかに心の中で傷ついていたが、医者の言葉でその理由を知ることができた。

「アリーシアはあんたとセシリアの子だろう。何度も言っているが、セシリアが亡くなったのはこの子のせいではなく、この夏が暑かったせいと、栄養不足のせいだ。むしろこの子の渾身こんんの世話がなかったらセシリアはあんたが来るまでもたなかつた。今まで苦勞をかけた分、幸せにしてやるのが父親の務めだ。それは平民でも貴族でも変わらないぞ」

つまり、父は母が亡くなったのをアリーシアのせいだと思っているのだ。

父親は医者という言葉をうるさい羽虫であるかのよう片手で振り払う。まるで聞く耳など持たない。急せかされたアリーシアにできたことは、母のいない家に戻り、小さなかばん一つに荷物を詰め込むことだけだった。それも母からもらった大事な本と少しの着替えだけである。

亡霊のようによりどころのない気持ちで連れていかれた先は、アリーシアが住んでいた町の外れではなく、にぎやかな中心街の大きなお屋敷だった。

小さいアリーシアの歩幅など気にすることもない父親に小走りで付き従い、入った屋敷は大きな玄關ホールにガラス窓がきらめくほどのまばゆい明かりが灯ともっていた。

「おかえりなさいませ。なんですよ、その薄汚い娘は」

部屋の豪華さに圧倒されていたアリーシアは、その声で初めてホールに人がいることに気づいた。真ん中にはこの国では珍しい金髪を結い上げた、アリーシアの母と同じくらいの年の人、そしてアリーシアと同じ年くらいの少女。他にも、お仕着せを着た使用人らしい男女が幾人か並んでいた。母に似ていると一瞬でも思ったのはその髪色のせいだろう。

「ちようどいい。これはアリーシアだ」

父はアリーシアを雑に紹介すると、どう説明していいのか少し迷った様子だった。やがて、アリーシアと同じくらい年の少女に目をやると、面倒くさそうに肩をすくめた。

「ジェニファー」

「はい、お父様」

ジェニファーと呼ばれた少女は隣の女性の娘なのだろう。母と同じように濃い金髪を結い上げた美しい少女だった。青い瞳をきらめかせて嬉しそうに父を見上げる。

「これはつまり、お前の妹になる」

「いも、うと？」

戸惑うジェニファーをよそに、金髪の女性のほうが目を吊り上げた。

「ハロルド。あなたまさか、本宅にあの泥棒猫の子を連れてきたの？」

「ハリエツト」

父親の静かな声はその女性を黙らせた。

「セシリアは死んだよ」

アリーシアの母が亡くなったという知らせに、使用人の間に動揺が走った気がした。父は口元をゆがめて、ハリエツトを見る。

「満足か」

「満足かなんて、ひどいこと。お悔やみ申し上げますわ。でもその方が泥棒猫だったことに変わりはありませんでしょう」

アリーシアは黙って成り行きを見守っていた。

知っていたのだ。

近所の数少ない友たちを見ても、父親が一ヶ月に一度しか来ない家なんてない。家に閉じこもりがちな母と、年をとってあまり動けないばあやの代わりに、アリーシアは積極的にならないうちに出ている。

特にここ二年はそうしなければ暮らしていけなかった。

近所のおばさんたちは、アリーシアを遠目で見ながら、アリーシアの父親がどこかの貴族だとひそひそと噂する。本宅があつて、奥さんと子どもがいることもそこから知つた。

父はおかしな人だとアリーシアは思つてゐた。お母様のことが大好きなのに、大切にしているとはとても思えない。お母様の容姿の美しさをいつも褒めたたえるけれど、お母様自身にはあまり興味がないように思えたのだ。アリーシアに至つてはいてもいなくてもどうでもよく、無関心。父親のそういうすべてのが腑に落ちた瞬間だつた。

「お母様は、知つてゐるの。お父様の本宅のこと」

聞かなければよかつたかもしれない。でも、噂を聞いてから落ち込むアリーシアを心配する母に、つい聞いてしまったのだ。

「誰から聞いたの？ いいえ。外に出ていれば嫌でも聞こえてくるものね」

悲しそうに微笑んだ母に、やはり聞かなければよかつたと後悔したがもう遅かつた。

「言い訳にしか聞こえないかもしれないけれど」

母親はアリーシアを、隣に座らせて話してくれた。いつも並んで一緒に本を読むソファだ。北の国でお祭りのために初めて外に出たセシリアにお父様が親切にしてくれたこと、駆け落ちしてきたこと。それは何度も聞いた思い出話だ。でも、そこからは初めて聞く話だつた。

「アリーシアは私が初めて外に出たつていうのがどうということかわからないわよね」

大事に育てられたということだと思つてゐたアリーシアは、首を傾げた。

「それなりに広いおうちだったと思うの。でもね、庭には出たことがあっても、周りは高い塀で囲まれていてね。本当に一歩も敷地の外に出たことがなかったのよ。お祭りは三日間だけ。初めての日にお父様と出会い、二日目には共に生きると決めた。三日目に、大切な本だけ持ってお父様と逃げ出したの」

子どものアリーシアが聞いても、全く計画性のない話であきれてしまう。

「お父様に奥様がいるなんてその時は知らなかったの。駆け落ちしたから、北の国では無理だったけれど、ここに来たら正式に結婚するものだと思っていたわ。でもね」

お父様は今の妻とは愛のない結婚だったため、離婚して再婚するつもりでお母様を連れてきたのだという。だが、お父様が北の国に商売に行っている間に娘が生まれ、離婚できる状況ではなくなってしまった。

「そして私も家出した身。その時にはアリーシアもお腹にいたし、とても故郷には帰れなかったの」

結果として甘んじて日陰の身になるしかなかった。

「誰も悪くないの。ただ、タイミングが悪かっただけ」

人のいい母はそう考えるかもしれない。でもアリーシアは違うと思うのだ。どう聞いてもすべて父が悪い。でも、アリーシアが父親を責めたら、母がどう思うだろうか。間に挟まってつらい思いをするのは母なのだ。

「お父様と旅した思い出だけで、私は生きていける。ハリーは私に初めて世界を見せてくれた人な

の」

アリーシアには母しかない。母にだけは幸せに過ごしてもらいたいアリーシアはそれ以上何も言えなかった。

玄関ホールでは、寒い中まだ話が續いていた。

「送金を止めたのはお前だな。ハリエツト」

「主がいない間、家を管理するのは妻の仕事。怪しいお金の流れを止めたとして、何の問題があるでしょう」

そしてそのはざままで、北の国から来た一人の女が死んだと、彼女にはそれだけのことなのだろう。つらい気持ちをさらに冷え込ませるようなハリエツトの言葉に、優しかった母に似ていると一瞬でも思った自分がアリーシアにはひどく愚かしく思えた。

「それで私をやり込めたつもりか。お前は心根まで醜みにくいな。セシリアとは大違いだ」
「まあ！」

二人のやり取りに、間に挟まった娘がおろおろしながら止めようとしているのをアリーシアは何の感慨かえがもない目で見ていた。何を思うことがある。もう母親はいないのだから。

「いずれにせよセシリアはもういない。お前はどんなに嫌でも、セシリアの娘の面倒を見ることになるんだ」

「なんですってー！」

セシリアの娘。お父様にとってはそれだけの存在である。

「庶子しよとはいえ、産まれた時からバーノン子爵家の籍に入っている。これからこの家で面倒を見ることになるからな」

アリーシアは、この針の筵むしろのような本宅でこれから過すごさねばならないのだ。

暖かい事務所で翻訳をしながら、これで母のための果物が買えると思っていたのがほんの一日前だなんて思えない。ふとめまいがしたアリーシアは、その場にしゃがみこんだ。そういえば、いづこ飯を食べたかも覚えていない。そのままホールの床に沈み込むように倒れたアリーシアは、その後どんな話し合いがあったのかは聞かずじまだった。

気がついたら、客室に寝かされていたのだった。それでもそれから一年は、意地悪されたり無視されたりしながらも普通に生きてこられたのに。

「アリーシア」

後ろからかけられた声にハッとす。油断した。アリーシアは緊張で体が硬くなった。

「オリバー様」

曲がりなりにも、父の娘としてなんとか暮らしていたアリーシアの生活を地獄に突き落としたのはほかでもないこの人だ。アリーシアはオリバーの無自覚な優しさが大嫌いだった。

「また少しやせたんじゃないのか」

「いえ。そんなことはありません。では」

「待って」

カートを押す手を取られ、アリーシアに鳥肌が立つ。

「僕からジェニファアに言ったんだよ。君を連れて嫁いでくればいいって。そうすれば少なくとも君が僕の目の届くところにいられる。ご飯だってちゃんと食べさせてあげられるから」

「いえ、この家では十分よくしてもらっていますので」

アリーシアは失礼にならない程度に強く腕を振り払い、そして先ほどの義姉の言葉を理解した。つまり、オリバーが言ったから仕方なくアリーシアを連れて行くのだということである。それはアリーシアをさらに暗い気持ちにさせた。

オリバーはアリーシアが冷遇されていることに早いうちに気がついていて、そしてことあるごとにアリーシアに優しくしようとするのだが、そのせいでジェニファアが嫉妬し、アリーシアが余計にひどい目に遭わされていることには気がついていないのだ。いや、本当は気がついていないのに、そのことには目をつぶっているような気がしてならない。いったい何が目的なのかと考えると、アリーシアはオリバーのことをとても怖いと感じてしまう。

とにかく、オリバーと一緒にいるところをジェニファア、ましてやハリエットに見られたら何をされるかわかったものではない。

「何をしているのかしら」

ジェニファアののがった声がした。案の定だ。

オリバーは降参したように両手を上げた。そんな気取ったところも気持ちが悪い。

「いずれうちで働いてもらうんだから、ちょっとその話をね」



「失礼します」

アリーシアは急いで立ち去った。まさかオリバーが婚約者を持たせてまで後ろからこっそり付いてくるとは思わなかったのだ。なぜアリーシアにかまうのか。放っておいてくれたらいいのに。

オリバーのところに「付いていきたくない」と言えばジュニファーに、「なぜ自分の言うことが聞けないのか」と責められる。「行きたい」といえば、「さすが泥棒猫の子どもね」と責められる。どちらにしろオリバーが出てくるとろくなことはない。食事抜きが今日だけならまだましなほうだとアリーシアは肩を落とした。

バーノン家に来たばかりの頃を思い出すと、そもそも「子爵家の籍に入っている」というお父様の言葉は、貴族である義母のハリエットには大きく響いたらしい。アリーシアが今後どんなところで生活しようとも、その振る舞いは子爵家の責任になる。ひいてはハリエットの責任になるからだ。客室で目が覚めたアリーシアにとって戸惑いばかりだったが、その日から子爵家での生活が始まった。最初の試練は家族そろっての食事だった。

アリーシアは母から食事のマナーについて自然に教わっていたので、父が訪れて一緒に食事をした時にも特に何も言われたことはなかった。だが、バーノン家ではどうやら食前の祈りがないので戸惑った。食事の時は、女主人が北の神々に祈りを捧げるのがアリーシアと母の習慣だったのだ。誰もやらないのなら自分かと思ったアリーシアは食前の祈りを始めた。北の国の言葉ではなく、父や他の人にも伝わるよう、セイクタッドの言葉に直して。

「遙かなる北の峰の神々よ、清涼なる風と水を我らに与えたまえしことに感謝します」

ドンと大きな音がして驚いたアリーシアが組んだ手を慌ててほどくと、テーブルの上で両手を震わせていたのは父だった。

「二度と」

地を這うような低い声だった。

「この家で二度と、北の国の祈りなど捧げるな。セシリアの代わりなどいらぬ」

母の代わりになろうとしたのではない。母の大事にしていた北の国の習慣を続けたかっただけだ。だがそんな主張は通るどころかそもそもさせてもらえずしなかつた。

それでも父は自分の見えないところでアリーシアが何をしていようと興味がなかつたが、義母は違った。

「今からでは遅いかもしれないけれど、子爵家として恥ずかしくないだけの勉強はさせます。異国の習慣などすべて捨てなさい」

最初にそう宣言されると、義姉のジェニファアと一緒に勉強が始まった。

アリーシアはジェニファアより半年だけ年下だが、同じ年齢の子どもの中では小さいほうだ。だが、義母はたくさんあつて余っているジェニファアのおさがりを着せようとはしなかつた。

「たとえ着られなくなつた服でも、ジェニファアの身に着けた物をあの女の子どもに着させたくないわ」

そう言つて、服は既製品を着せられた。いや、もしかしたら古着だつたのかもしれない。大きく

なつても着られるようにと、少し大きめで最小限の数しかなかったが、短くもなく、きつくもない服にはアリーシアは感謝した。丈の短い服を着て歩くのは正直なところつらかったのだ。

部屋については、

「偶然にでも顔を合わせたくないわ」

という義母の希望で、家族のいる二階ではなく、一階の使用人の小さい部屋になったが、一人部屋だったのは助かった。異国の習慣など捨てなさいと言われても、いつもしていた寝る前の祈りと本を読む習慣だけは捨てたくなかったからだ。それまで失くしてしまつたら、母の思い出まで捨ててしまふのと同じ気がした。

「子爵家の令嬢として、恥ずかしくないだけのこと言われても、学校にも通わず、家庭教師も付けなかつた異国の子どもにどこから何を教えたらいいのかしら」

と戸惑っていた家庭教師は、アリーシアが読み書きができると知って目の色が変わつた。

「お母様と毎日勉強をしていたんです」

母も幼い頃からずっと自宅で勉強を教わっていたという。

「セイクタッドの言葉も教わっていたのよ。だから、たとどしくてもハリーとお話してきたの。

勉強は大事よ」

母にはそう言われ、セイクタッドとアルトロフ両方の言葉の読み書きを勉強していた。そのおかげで翻訳の仕事をもらえてからは、より熱心に勉強したものだ。

「あつという間に私を追い越してしまつたわね」

嬉しそうな母に、

「お母様も一緒に外に行きましよう」

と何度誘っても、母は外に行くのは好まなかった。それが、幼い頃から外に出たことがなかったせいなのか、外で人に見られるのが嫌だったからなのかはアリーシアには今でもわからないのだけだ。

母の具合が悪くなってベッドで過ごすことが多くなってからは、今度はアリーシアが北の国の本やこの国の本を読んで聞かせたりしたものだ。北の国の本は母が国から持ってきて大切にしていたもの、そしてこの国の本は、母のために父が買ってきてくれたもの。本は高価なものではあるけれど、母のためなら父はお金を惜しまなかった。もっともその後、母が持ってきた本以外はパン代になってしまったが。

家庭教師とではあっても、久しぶりに母の話ができて嬉しかったアリーシアは、目をきらめかせてその思い出を語った。

しかし、それが義母の逆鱗げきりんに触れたらしい。初めて木の枝で叩かれたのはその次の日である。家庭教師と一緒に入ってきた義母は怒りに目を吊り上げ口をへの字に曲げていて、美しい顔が台無しだとアリーシアは思ったが、その怒りが自分に向けられているとは思ってもよらなかった。

「ハロルドが北の国の話をするなど言ったのを忘れたのかしら」

「お父様が言ったのは、北の国の祈りを捧げるなどということだけです」

思わず言い返したら、義母は無表情になり家庭教師の備品から何かを取り上げた。さっと手をひ

らめかせた途端、アリーシアの頬に痛みが走った。あつけにとられた家庭教師がはっとして止めるまで、木の枝で何度も叩かれた。

「この木の枝はそんなふうには使うものではありません。宿題を忘れた子どもの手を軽く叩くだけのものです」

頭をかばったアリーシアの手にはミミズバレができていたし頬には一筋赤い線が入っていた。

「この子に、二度と北の国の話をさせないで」

家庭教師に言い置くと義母は息を切らし、ほつれた髪の毛をなでつけながら足音荒く勉強部屋を出ていった。こっそりと顔を背けたジェニファアの口元がかすかに上がっているのをアリーシアは見逃さなかった。

この家に味方などいない。中年に差し掛かろうという年の家庭教師の女性も、雇い主に何か言えるわけがない。アリーシアをかばったことも下手へたをすると解雇されかねない行為だったのだから。

結果として家庭教師の女性はその時は解雇されなかった。バーノン子爵家に庶子が引き取られたという噂を広げたくなかったのだらうとアリーシアは思う。そしてそれがこの家でのアリーシアの唯一の幸運だったかもしれない。

バーノン子爵家でのアリーシアの立ち位置を理解し、またアリーシアの勉強に対する熱意を汲み取り、できるだけのことをしてくれたのだから。

家庭教師の先生はまず徹底的に義姉のジェニファアを持ち上げ、アリーシアにその振る舞いを学ぶようにと言うことから始めた。アリーシアを放っておいて、ジェニファアにだけ授業する時

びたびだ。その間、アリーシアには自習するようにと本が数冊置かれるだけである。

最初戸惑っていたアリーシアだが、すぐに家庭教師の意図を理解した。

教わるのではなく、学びなさいと言ってくれているのだ。アリーシアがものを覚え、賢くなればなるほどいじめられるということを見抜いていた。

家庭教師の先生は、アリーシアをよく見ていて、一冊の本を学び終わるごとに積み上げる本を換えてくれる。一見すると放置されているようにしか見えないというわけである。

また、ジェニファアは意地悪であつても貴族らしく、小さなレデイであり立ち居振る舞いは上品だった。

アリーシアから見ても、ジェニファアは箱入りのお嬢様だった。あんな父親なのに、尊敬し慕っている。最初アリーシアのことはよいも悪いもなく、単に家にもう一人女の子が来たくらいにしか思っていないかつたのだと思う。だが数日して、母親からなぜアリーシアが妹と言われたのか聞いたのだろう。一緒に勉強するように言われた時も、

「汚^{けが}らしいわ」

と汚い者でも見るようにアリーシアを見るようになった。だがアリーシアは気にしなかった。お母様は汚らわしくなんかない。だとしたらアリーシアだって汚らわしいものなんかではないと強く信じていたからだ。

好き嫌いは別にして、同世代の見本がいることはアリーシアにはとてもよい影響を及ぼした。

次第に北の国らしさはなくなり、ジェニファアのように振る舞うことで屋敷でも目立たなくなっ

た。目立たなければ叱られることもない。使用人はアリーシアが女主人に好かれていないのを知っているからかわつてこない。父親はアリーシアがいないように振る舞う。そんな毎日はずく寂しいものだった。

だが母親がいなくなり、何のために生きているのかすらわからなくても、アリーシアは少なくとも生きていられたし、学ぶこともできたことに感謝して暮らしていた。北の国のことを口に出せなかったのはつらかったが、毎日夜には小さなかばんから北の国の本を出して小さな声で読み上げ、胸に抱きしめて我慢していた。それに、アリーシアには小さな希望があった。

それは家庭教師の先生と偶然二人きりになった時のことだ。

「この国では一六歳が成人なの。一六歳になったら親の許可がなくても自分で働いて暮らせるようになる。知識は武器になるわ。このまま勉強を続けるのよ」

目も合わさずにささやかれたそれが、アリーシアの心の中で形になるのしばらくかかったけれど、自分もやがて大人になるのだと、そうしたら嫌いな家は出ていいのだという光が見えたのである。

そうして一年、アリーシアより半年早い、ジェニファアの一四歳の誕生日が来て、この時はやはり家族と使用人だけのにぎやかな誕生日が開かれたらしい。アリーシアは呼ばれもせず、食事さえも忘れられ、にぎやかな食堂を部屋の外から眺めると、静かに自分の部屋に戻った。

大丈夫。自分にはお母様との楽しい思い出がある。自分があの中に入ってもどうせ義母の皮肉を聞かされるだけで、そんなの主役のジェニファアだって嫌に決まっている。小さい頃のことまでは

覚えていないけれど、自分には一二年分の楽しい誕生日の思い出があると言い聞かせながら。

そんなふうには遠慮して小さくなって過ぎていても、運命はアリーシアには優しくなかった。

家庭教師が来た日、誕生会が楽しかったと報告するジェニファーは、お父様は仕事に行く日付けをずらしてわざわざお祝いしてくれたのよと嬉しそうだった。またしばらく、商売で家をあけるのだという。いつも通り無言のアリーシアにジェニファーは無邪気に言った。

「なぜアリーシアは私の誕生会に来なかったの」

一言も知らされなかった。午後の半ばから始まって、夕方まで続く賑わいに、自分がどう参加しているのかわからなかった。いつもうつむいているアリーシアがジェニファーの言葉に傷ついたように上げたその瞳には涙が光っていたとしても仕方のないことだった。家庭教師はさすがに胸が痛んだのか、震える口元を隠すように片手で覆った。

「知らなかったから」

涙を落とすまいと口を引き結んだアリーシアだったが、たまらず一粒だけ涙が落ちた。

「なによ。お祝いにも来なかったくせに、私が悪かったみたいじゃない。誕生日のプレゼントだって何も用意していないでしょ。あきれたわ」

ジェニファーは席を立つとどこかに行ってしまった。自分の物など何一つないのに、どうやって誕生日のプレゼントを用意すればよかったのか。そもそも、誕生日がいつかさえも知らなかったというのに。

家庭教師が慰めるためかそつとアリーシアの背に手を伸ばそうとした時、バンとドアが開いて

ハリエツトが入ってきた。家庭教師が思わず備品を確認したのが見えた。優しい先生が、あの時から罰に使う木の枝は持ち歩かなくなったことをアリーシアは知っていた。

だがハリエツトは木の枝がなくてもかまわなかったらしい。手に持った扇でいきなりアリーシアの腕を叩いた。その衝撃と驚きでアリーシアの体は大きく跳ね、椅子から転げ落ちてしまった。

「奥様！」

家庭教師の悲鳴のような声はハリエツトの耳には入らなかった。

「役立たずのくせに、ジェニファーに嫌な思いをさせるなんて！ 誕生会に出たかったなんて、おこがましいにもほどがあるわ！」

出たかったなんて一言も言っていない。だが言い返したら余計に叩かれると思ったアリーシアは黙って耐えた。ひとしきり苛立ちを発散させると、ハリエツトは部屋を出ていった。

入れ替わりに入って来たジェニファーは、床に崩れ落ちているアリーシアを見てふんと鼻で笑った。

「いいこと。一四歳になったから、今度私にも婚約者ができるのよ。知らなかったなんて、また私のせいにされたらいやだから教えておいてあげるわ。お相手はね、ティナム伯爵家の次男のオリバー様と言うの。三日後、顔合わせがあつてこちらにいらっしゃるのよ」

夢見るように話されても、アリーシアは叩かれた腕が痛くて立ち上がることもさえできず、なんの反応もできなかった。

「お母様が庶子を引き取って育てているということは有名なのよ。捨て置いてもいいのに、ちゃん

と屋敷に引き取って教育もしているって。当然、当日はあなたもバーノン家の一員として挨拶に出るんだから。くれぐれもうちの家名に泥を塗らないよう気をつけることね」

その日はとても勉強どころではなかったし、浮かれたジュニアが勉強部屋に戻ってくることもなかった。

「悲しいことに、世の中は公平ではありません。特に女性にとっては」

家庭教師の先生は道具を片付けながら誰に言うともなくつぶやいた。また誰かが入ってきて言いがかりをつけられたら困るからだろう。

「でも、私のように結婚しなくても仕事をして生きている者もいます。私たちが住んでいるこのヴィランという町は大きな交易の場所です。読み書きができればきつとなんとかなる。強く生きましょう、アリーシア」

世の中は公平ではない。同じ娘でも、片方は祝われ、片方は無視される。それでもなんとかなると言ってくれた家庭教師の先生が来たのは、その日が最後だった。

それから二日たち、腕の痛みもようやくと治まり、明日ジェニファアの婚約者が来るという日のことだ。アリーシアは珍しく、他の使用人にお風呂で丁寧^{ていねい}に磨かれていた。

「さすがにあんたが使用人みたいな格好をしてると困るんだってさ。いまさらとりつくろったってしょうがないのに」

アリーシアは人並みに一応清潔にしているつもりだけれども、まっすぐな黒髪は手入れはできず

に自分で三つ編みにしているだけだし、前髪も中途半端に長くてほさほさだ。

「元はきれいな黒髪なのにねえ。お嬢様や奥様の柔らかい金髪も素敵だけれどさ、あんたみたいなまっすぐの髪もきれいなもんさ。何より黒髪は着る服を選ばないんだよ」

今までほとんど話したことのない、調理の仕事をするお手伝いの人が髪を洗うのを手伝ってくれている。

「お嬢様か奥様の侍女を貸してくれてもよさそうなんだけど、それは駄目なんだって。余ってる使用人誰でもいいから、少なくとも、ちゃんと面倒みられる感じにしろって命令であたしがやることになったのさ」

「ありがとう」

アリーシアは乾かしながら髪に何かを塗り付けている手伝いの人に礼を言った。理由はどうあれ、清潔にするというのは気持ちのよいものだ。母親といる時は常に清潔にしてハーブの香りのする衣服を着ていたものだが、ここではそんなことはできなかった。

「これはね、庶民の使う髪油だよ。いい匂いもしないけど、ほんのちよつとでつやつやになるから、私の物を持ってきたのさ。さ、つけておくよ。ああ、きれいな子を手入れするのは楽しいねえ。娘はもう大きくなってしまったからね」

髪の手入れを終えると、明日また髪を結いに来るといって出て行ってしまった。

「きれいな子」

アリーシアは自分がきれいかどうかはあまり興味が無い。だが、美しくって優しい言葉をかけられ

てお世話してもらったのは久しぶりだったので、その言葉を宝物のように抱えて布団に潜り込んだ。次の日、お茶の時間に合わせて来るという婚約者を迎えるために義母と義姉は午前中から早々に準備に引っ込んだが、昼食後ほんやりしていたアリーシアも、昨日のお手伝いの人に自分の部屋に引っ張り込まれた。昨日と違って少し不機嫌だ。アリーシアの何も置いていない狭い部屋を見て顔をしかめたが、何も言わずアリーシアを上から下まで眺めて、腕にかけていた服をポンと叩いた。

「ほら、新しいドレスだよ」

「え？ 私にも？」

アリーシアは少なくとも体に合った普段着はもらっている。それで十分だと思っていたので驚いたのだ。

「少なくとも、生地だけは上ものさ。だけど、一三歳の子に着せる色じゃない。見てごらん、この地味な緑色をさ」

使用人が広げて見せてくれたドレスは、深い森の奥のような暗い緑色だった。不機嫌だったのは、その服が気に入らなかつたかららしい。アリーシアは少し笑みを浮かべて首を横に振った。

「別にいいの。私は目立たないように端っこにいればいいだけだから。あの、着替えるのを手伝ってくださいますか」

「もちろんだよ」

二人立ったら身動きも取れないような狭い部屋だが、後ろにあるボタンを留めてもらうだけでも、久しぶりの人との触れ合いに嬉しくなる。

「あんたいつも三つ編みだけど、中途半端な前髪は上げておでこを出してしまおうか。そして前髪と一緒に横の髪も後ろに。ほら」

ほらと言われても鏡も何もない部屋だ。

「ドレスが地味な緑色と思っていたけど、あんたの白い肌が引き立つし、緑の目がいつそう明るく見えてきれいだねえ。さすがハリエツト様。やっぱり趣味がいい。それにあんた」

アリーシアの仕上がりを見て、さっきまで文句を言っていた使用人の機嫌はあつという間に直ってしまった。

「前髪の下にこんな美人さんが隠れてるなんて思わなかったよ。さ、たしか玄関でお出迎えだよ。行っておいで」

「はい。ありがとうございます」

アリーシアはわずかに口元をほころばせて礼を言った。

そのままの温かい気持ちで玄関ホールに出ると、既に子爵家の家族は皆集まっていた。

ハリエツトは遅いと言いたかったのかもしれないが、父もいたのでそれは我慢しようだ。その代わりうつむくアリーシアのドレスをちらりと横目で見て、吐き捨てるように言った。

「卑しい身にふさわしい、薄暗い格好ね」

このドレスを選んだのは義母なのだ。親切に新しいドレスを作ってくれたのは、これが言いたかったからに違いない。

「不気味な目の色にふさわしい、沼みたいなドレスよね」

義姉も負けていない。そして父親はそんな二人を諫めることもなく、大きなため息をついて、アリーシアを叱責しっせきしただけだった。

「セシリアは明るく太陽のような女性だったというのに、お前ときたらかけらも似ていないな。せめて下を向かず、胸を張れ」

下を向かず胸を張っていたら叩かれるような家に住んでいて、明るくなれる人がいたら教えてほしい。そうは思ったものの、母に恥ずかしくないようにと、アリーシアはジェニファアの横に並ぶと顔を上げて前を向いた。その瞬間、玄関の大きな扉がゆっくりと開いた。

「ティナム伯爵家。オリバー様がいらつしやいました」
外で待っていた家令が顔を出し、客の訪れを告げた。

冬の寒い風と共に入ってきたのは、まだ少年の初々うづうしさを残しつつも、そろそろたくましさも感じさせる、薄茶の髪、薄茶の瞳の甘い顔立ちの青年であった。後で聞かされた情報によると年は一七歳、義姉のジェニファアとは三歳差だという。

家族のほうを見てにこりと親しげに笑ったのに好感が持てたのだろう。アリーシアは隣でジェニファアの気持ちが生きたのを感じたが、自分はどうもつむきそうになる。だがさつき着替えを手伝ってくれた人も、きれいだと言ってくれたではないか。その言葉を思い出すと、アリーシアの頬に明るさが戻り、何とか顔を上げたままでいられた。

「オリバー、よく来てくれた」

「ハロルド。いつも仕事では会っているではありませんか」

二人はそもそも仕事を一緒にしているので、さっそく親しげに挨拶をしている。それはそうだが、義母がわざわざアリーシアを探してまで話しかけたことによると、

「ジェニファアは一人娘だから、オリバー様にはハロルドの商会を分ける形でうちに入ってもらおう。そしてジェニファアの息子がバーノン子爵家を継ぐことになるのよ」

ということだからだ。つまり自分の事業を継ぐ人だから親しいということになるのだろう。

だがはにかんでいるジェニファアの様子を見ると、どうやら二人は今日初めて会うようだ。

「娘とは初めてになるね。紹介しよう」

オリバーという人は今日を楽しみにしてきたようで、父の紹介を待たず、急ぎ足でジェニファアのほうに歩み寄った。その性急な様子に父も苦笑しているが、苦笑であっても父親の笑顔を久しぶりに見たアリーシアは少し驚いた。

だが、にこやかなジェニファアの前をオリバーはすつと通り過ぎると、アリーシアの前で止まり、アリーシアと目を合わせてにこりと微笑んだ。

「はじめまして。オリバーと言います。ハロルドの娘さんがこんなきれいな緑の瞳だなんて知らなかったよ。黒髪とは珍しい組み合わせだけど、素敵だね」

なんと言っているかわからず沈黙していたアリーシアに、オリバーはどうしたのというように首を傾げてみせた。

「あー、ゴホン」

ハロルドが気まずげに咳払いせきはらをした。

「それは妹のアリーシアだ」

「アリーシア。では」

「隣が姉のジェニファア。あー、紹介しようと思っていたのは姉のほうだ」

オリバーは一瞬困惑した顔を見せたがすぐ微笑みを浮かべ、ジェニファアのほうに体を向けた。

「はじめまして。姉妹そろって美しくて驚いてしまったよ。僕はオリバー。よろしくね」

別に間違えたわけではない。最初に妹のほうに挨拶してしまっただけという雰囲気^{かも}を醸し出しながらきちんと挨拶し直すオリバーは、頭がよく気遣いのできる人なのだろう。

でもアリーシアを見て輝いた瞳と、ジェニファアがお相手と知って落胆した表情は、見る人が見ればはっきりとわかるほど違っていた。

「ジェニファアはこの国では珍しい金髪でね。君も噂くらいは知っているかと思っていたが」

「いえ。申し訳ないのですが、そういった噂には疎^とくて。これからお互いに中身を知っていけるといいのですが」

オリバーはもうアリーシアのほうに目もくれなかったが、オリバーの言い方は、ジェニファアの見た目が好みではないと言っているのと同じだった。

「さあ、立ち話もなんだし、それでは応接室へ行こうか」

アリーシアはハリエツトに睨^{にら}まれたので、一礼すると部屋に下がろうとした。

「あれ、アリーシア。君もおいでよ」

「あの、私」

行きたくない。行ったとしたら針の筵なのは明らかだ。断ろうとしたアリーシアを見て、ハリエツトが小さく一つため息をついた。

「あれはいいのですよ。家族としてオリバー様にもかかわってくださることですから紹介はいたしましたが、卑しい生まれですのでもまだしつけがなっていないくて」

「それならなおのこと、こういう場には慣れさせるべきでしょう。君、僕はちよつとくらい不作法であつても気にしないよ。さ、おいで」

アリーシアは慌てて首を横に振った。

「オリバー様の好意を無駄にするつもりなの。仕方がないからいらっしやい」

ハリエツトの一言でお茶会に参加することになってしまったアリーシアはとても憂鬱ゆううつだった。

なんとかオリバーが会話に入れようとしてくれても、ハリエツトとジェニファーが邪魔をする。そもそも会話になど入りたくなかつたアリーシアもつらい。

極めつけは父親の言葉だった。

「どちらの娘も私の血を引いていることに違いはない。残った娘もまあ、どこかには嫁がせるだろうから、オリバーは好きなほうと婚約すればいいだろう」

とんでもないことを言い出した。慌ててジェニファーを見ると、その言葉に衝撃を受けているのがまるわかりだ。アリーシアは自分は今もう父からの愛情をあきらめていたから何を言われても我慢できたが、ジェニファーは父を慕っているはずだ。せめてジェニファーの気持ちに気がついて大切に上げてほしいと心から願った。もちろん、ジェニファーが好きだからではない。アリーシア

に八つ当たりがくるのが嫌だからだ。

「ありえませんか。アリーシア、もう十分でしょう。下がりなさい」

娘の婚約者になる相手に夫婦の不仲や家のごたごたを見せてはいけないことくらいアリーシアでわかる。オリバーがそれをじっと観察しているのに他の家族は誰も気がつかないのだろうか。

アリーシアが言われた通り下がろうとして立ちあがると、オリバーはジャケットの内ポケットに手をやり、そこから何かを取り出した。

「これ、お土産には子どももつばいかと思っただけだけど、僕の妹になるんだからいいよね。手を出してごらん」

アリーシアは思わずハリエットとジェニファアのほうをうかがったが、断つても断らなくてもお土産を用意されていた時点で結局は嫌がられるのだ。それならまだ素直に手を出したほうがいいと判断した。

「はい、どうぞ」

「ひっ！」

アリーシアは手のひらに載せられた、色とりどりの紙に包まれた館を思わず取り落としていた。

グシャリと。

踏みつぶされた館の記憶がよみがえる。

「お母様」

思わずつぶやいた一言と共に、押し込めていた記憶があふれ出す。

「アリーシア。君。涙が」

「失礼します」

応接室を飛び出したアリーシアの行く先など、自分の部屋しかなかった。

その出会いの何が原因だったのかはアリーシアにはわからなかったが、その時以来、オリバーはバーノン家を訪れるたびにアリーシアのことも気にかけてくれるようになった。

だがそれが迷惑だとはどう説明しても気がついてはくれなかった。

オリバーが来た日の夜、狭い自分の部屋に閉じこもっていたアリーシアはハリエットに引きずり出された。いつもは人目のないところでひっそりといびられるだけなのに。玄関ホールにはジェニファーがおり、使用人も集められていた。父親もいたが、退屈そうにしているだけでハリエットを止めてくれる気配はなかった。

「姉の婚約者の気を引くなんてさすが泥棒猫の娘ね！ その薄汚い黒い髪も、淀んだ沼のような緑の目もどこがいいというのかしら」

アリーシアもこの一年で、言い返したら状況がひどくなるだけだということにはわかっていたはずだった。だが閉じ込めていた母親のことを思い出してしまった今日は、それは無理だった。

お母様との笑顔の絶えない明るい毎日の暮らし。お母様の優しい笑顔。誰も傷つけたこともなく、理不尽だとわかっているのにお父様のことを責めたりもしなかった。

「気を引いてなんていません。それにお母様も泥棒猫なんかじゃない！」

お母様はお父様のことが大好きだった。お母様が泥棒猫じゃないと言ってしまったら、悪いのはお父様ということになる。お母様なら自分が何と言われようともお父様を大事にしただろう。

そう思っていたから、今まで何を言われても言い訳せずに我慢してきたのだ。アリーシアは両手を体の横でぐっと握ると、ハリエットを睨みつけた。ハリエットは今まで従順だったアリーシアのその眼光に思わず一歩引いて、そのことに悔しそうな顔をした。

「お母様は優しくかった。いつも笑顔で楽しそうにしていたの。あなたのように人に意地悪をしたり、怒鳴ったり、ましてや叩いたりしたことなんてないんだから！」

「なんですって」

ハリエットの低い声が響いた。ここでやめればよかったのだが、アリーシアは止まらなかった。

「私はこのお母様とそっくりの緑の瞳が大好き。沼の色なんかじゃない。北の国の新緑の色だってお母さまは言っていたもの。春の色なんだって。それに、黒髪の何が悪いの！」

これには居合わせた使用人たちもそうだといいように頷いている。何しろ、自分たちだって黒や濃い茶色の髪がほとんどで、この国ではそれが当たり前で美しいものなのだから。

「お母様は私の髪をとかしながらもいつでも言っていたわ。『美しいわね。お父様とそっくりのアリーシアの髪が私は大好きよ』って」

「セシリア」

つぶやいたのはすべてを興味なさそうに見ていたハロルドだ。だがそのつぶやきはハリエットの怒りに油を注いだ。

「その名前はこの家では許されません。北の国の話も禁じましたはずです、アリーシア。何のために家庭教師をつけたのかしら。まったく貴族としての態度が身についていないわ」

母親のことも、北の国のことも、貴族としての在り方に何の関係もない。アリーシアは叫んだ。

「意地悪なあなたみたいな人が貴族の見本だっていうなら、貴族なんてなりたくない！」

ずっと我慢していた。子爵家に引き取られたくなかった。お母様がいなければどこだって同じだと思っていたのだ。

「そう。それならちようどよかったわ」

ハリエツトはわが意を得たりとばかりに微笑んだ。

「情けを与えるからつけあがるのです。ジェニファーと姉妹？ 同じ立場などありえませんが」
アリーシアから自分が妹だなどと主張したことは一度もないと言いたかった。

「お前は明日から使用人です。食事と住むところを与えられるだけかもしれませんがと思いなさい」

この家の娘ではない。明日から使用人だということを、屋敷に知らしめるために皆を集めたらしい。子爵家の籍に入っているからということでは我慢していたハリエツトの糸は、今日のオリバーの来訪でぷつんと切れてしまったのだ。愛娘が泥棒猫の子どもに方が一でも劣ってはならないということなのだろう。あるいは、自分とハロルドとの関係に思いを重ねたのかもしれない。

「旦那様、さすがにそれは行きすぎではありませんか」

家令が黙っていられないように口を挟むが、ハロルドは肩をすくめただけだった。その瞳はうつろで、この家の人はその目に誰一人として映っていないかのようだった。

セシリアの娘であるアリーシアさえもだ。

「あれのことはハリエットに任せてある」

ハリエットが勝ち誇ったように微笑んだ。

母が亡くなってからちようど一年、その日からアリーシアは屋敷の下働きになった。